

## 創世記8章20-21節 「人の心が悪だから滅ぼさない神」

### 1A 全焼のいけにえ

1B 神の憐れみ

2B 恵みの賜物と源

3B 芳しい香り

### 2A 恵みによる救い

1B 幼いときからの悪

1C 罪の受け継ぎ

2C 人の行いによらない救い

2B 神の真実による救い

1C アブラハムとの契約

1D 行いによる結果

2D 結ばれる実

2C モーセによる契約

1D いのちへの道

2D 違反した民

3C ダビデとの契約

4C 契約の更新

1D 心の一新

2D 御霊の働き

3D 血による契約

## 本文

創世記8章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回で7章まで来ました。午後礼拝で、8-9章を一節ずつ見ていきますが、今朝は、8章20-21節に注目します。「<sup>20</sup>ノアは主のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜から、また、すべてのきよい鳥からいくつかを取って、祭壇の上で全焼のささげ物を献げた。<sup>21</sup>主は、その芳ばしい香りをかがれた。そして、心の中で主はこう言われた。『わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらすはしない。人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。わたしは、再び、わたしがしたように、生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない。』」

ノアとその家族が、動物らとともに箱舟に入って、一年ぐらい過ぎました。水が引いて、箱舟はアラテ山に留まり、ついに水が干上がりました。そして、主が箱舟から出なさいと命じられます。そこで出ていきましたが、ノアが初めに行ったのが、この、全焼のいけにえを献げたことです。そのい

けにえの香りをかがれた主は、再び、水による裁きは行わないと決められました。ここから、また、ノアに対する主の語られたことばから、私たちに対する神のみこころを知ることができます。

## 1A 全焼のいけにえ

### 1B 神の憐れみ

まず、ノアが約一年ぶりに、箱舟から出てきた時、初めに行ったのが、全焼のささげ物を献げたということです。主は、ノアとその家族によって、世界を全く新しくやり直そうとしておられます。彼の前には、自分たちに大きな世界が広がっています。そして、何でもできたのです。みなさんが、自分のために世界が用意されて、全く新しくすべてがされたら、初めに何をしますか？例えば、世界でなくとも、どこかの南洋の島がすべて自分のために用意されて、ホテルも何もかもが、自分だけのために用意されて、そこに到着したら何をしますか？その初めにすることが、おそらく自分にとって最も大切なことだと思います。初めにすることが、第一に優先されるからです。

それが、ノアにとっては、主に対するいけにえでした。大洪水になり、すべての生きている物が死に絶えたのに、自分たちだけは生き延びています。そのことを約束して、事実、約束を守ってくださった神に感謝することが、ノアにとって第一のものとなっていたのです。

そして、これが「全焼のいけにえ」です。これは、すべてを祭壇の火によって焼き尽くすので、全焼のいけにえと呼ばれています。これは、すべてを主に献げるという意味です。主によって、このような憐れみを受けているのだから、私はすべてを献げますという意思表示です。ロマ 12 章 1 節には、こう書いてあります。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

献げるということについて、これは、自分が何かしよう、これをして、あれをしようという意志を置いて、ただ主の前に自分を明け渡すことを意味しますね。自分が、神の前にこれだけできるという供え物ではなく、むしろ、自分は何もできない、神の前では罪人である。だから、あなたの憐れみだけで生きるしかない、このありのままの自分を差し出しますという、自分自身が供え物になっているのです。預言者ミカが語りました。「ミカ 6:7-8 【主】は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の背きのために、私の長子を、私のたましいの罪のために、胎の実を献げるべきだろうか。主はあなたに告げられた。人よ、何が良いことなのか、【主】があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」

## 2B 恵みの賜物と源

このように、神の憐れみに対して、ただ心から感謝を表し、すべてを明け渡して礼拝する人たちの姿が、聖書には出てきます。けれども、同じように憐れみを受けたので、「良かった、自分は助

かった。ラッキー！」とばかりに、主のところには来ない人々も大勢います。十人のらい病人、ツアラアトに冒された人々の話です。ルカ 17 章 11-19 節です。

11 さて、イエスはエルサレムに向かう途中、サマリアとガリラヤの境を通られた。12 ある村に入ると、ツアラアトに冒された十人の人がイエスを出迎えた。彼らは遠く離れたところに立ち、13 声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちをあわれんでください」と言った。14 イエスはこれを見て彼らに言われた。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」すると彼らは行く途中できよめられた。

15 そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。17 すると、イエスは言われた。「十人きよめられたのではなかったか。九人はどこにいるのか。18 この他国人のほかに、神をあがめるために戻って来た者はいなかったのか。」19 それからイエスはその人に言われた。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」

ツアラアトに冒された十人のうち、一人だけが主のところに戻り、感謝して、ひれ伏しました。ほかの九人は、戻ってこなかったのです。これは、いいかえると、「恵みの賜物を求めて、恵みの主を求めない」のか、「恵みの賜物を受けて、恵みの主に立ち返る」のかの違いです。多くの人は、神からの賜物を恵みとして受け取っています。それは喜んでいるのですが、その賜物をくださった方には目も留めず、感謝もせず、自分自身が得したと思うわけです。すべての良いものは、その主である神から来ています。そのことを、感謝して、その神をあがめるのが、人の道です。

### 3B 芳しい香り

そして、主は、ノアの全焼のいけにえについて、「**主は、その芳ばしい香りをかがれた**」とあります。これは、主が心地よく、このいけにえを受け入れられたということです。私たちが、バーベキューの時に、とってもいいにおいがしてくると、「う～ん、最高！」となるでしょう。それと同じです。

つまり、主は、ノアがすべてを明け渡す、このいけにえをとっても喜ばれているということです。また、繰り返しますが、主は、私たちに完璧を求めておられません。主ご自身が完璧な方ですから、人間が何か良いものを行なったとて、大したことではないのです。そうではなく、心を尽くして、思いを尽くして、力を尽くして主を愛していること、この不十分で、弱き自分であるけれども、ありのままを、そのまま差し出していること、その献身を喜ばれているのです。

二人の人が祈っていて、一人はパリサイ人で、自分は、これこれのことをしてきましたと祈っています。しかし取税人は、自分の胸をたたいて、「**神様、罪人の私をあわれんでください。**」と祈りました。(ルカ 18:13) 主が、彼がご自身の前で、そのままを告白し、お願いしているところを喜ばれ、そ

れで、この者を、パリサイ人よりもむしろ義とみなされたのです。主は、献身している人々を、このように芳しい香りとしてみなしてくださっています。

## 2A 恵みによる救い

### 1B 幼いときからの悪

そして、このいけにえの香りをかがれて、主は、すごいことを心の中で思われました。「わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらさしはしない。人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。」

### 1C 罪の受け継ぎ

主は、人の心が思い図ることが、悪であるから、水で彼らを消し去りました。ところが今は、悪だからこそ、大地に呪いをもたらすことはせまいと誓われているのです！あれれ、これでは真逆のことを行われていますね。悪者だからこそ、裁かれるべきなのではないでしょうか？

そこで、ここの主の思いを理解する鍵が、「**幼いときから**」ということなのです。神は人をご自分のかたちに造られたのに、彼らの思い図ることが悪に傾くを見て、それで残念に思われて、滅ぼされました。けれども、もしそれで滅ぼされるのであれば、何度、裁いて滅ぼしても、再び滅ぼさなければいけません。なぜなら、彼らが存在する以上、そこには罪があるからです。幼い時から悪であるというのは、生まれた時から罪の性質を、罪を行う傾向を持っているということです。

事実、次の9章の終わりには、ノアがぶどう酒を飲んで泥酔し、全裸で寝そべっている姿が出てきます。あの、信仰の英雄であるノアが、見るも無残な姿で出てきます。正しい人で、全き人であり、神は恵みをもって彼を救われるように選ばれたのですが、その本人が、他の滅ぼされた者たちと同じ、罪の傾向を持っていたのです。

そうです、アダムが罪を犯し、彼が子を生んだら、次の記述がありました。「5:3 アダムは百三十年生きて、彼の似姿として、彼のかたちに男の子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた。」神のかたちではなく、アダムのかたちにセツは生まれました。そして、神の似姿ではなく、アダムの似姿に生まれたのです。ですから、神に命じられても、背いたアダムの罪の傾向が、そのままセツにも受け継がれたということなのです。

私たちはとかく、幼い子は無垢で罪がないけれども、大人になっていき、そこで罪を覚えると思いがちです。罪を犯すようになったから罪人になったのだと。事実、エホバの証人などの異端や、イスラム教などの他宗教の教えでは、人が罪を犯したから罪人になるのだと教えます。けれども、私たちは知っています。幼い子が、どれだけ悪に傾いているのかということです。私たちは、幼い子たちに、嘘をつきなさいと教えなくても、嘘をつきます。我がまを言わないで、他の人のことも

考えなさいといっても、わがままを通します。後から罪を行うのではなく、罪を行うことが自然なのです。言い換えれば、生まれた時に、悪を行う傾向をすでに持っており、それで結果として罪を行います。罪を行ったから罪人ではなく、罪人だから罪を行うのです。

ダビデは、主のころにかなった人でした。主ご自身が、そうダビデを表現されました。ところが、彼は最も栄えていた時に、なんと人の妻を奪い取り、子を宿らせ、それを隠蔽するために、彼を殺すという大罪を犯しました。こんな善良な人がどうして、こんなひどいことを行えるのか？と私たちは驚くことがあります。いいえ、聖書的な人間観に立てば、ダビデのように、罪を犯し得るのです。ダビデは、自分の罪が表面的なものではなく、幼い時からの根本的なものであること悟りました。「詩 51:5-6 ご覧ください。私は咎ある者として生まれ罪ある者として母は私を身ごもりました。6 確かにあなたは心のうちの真実を喜ばれます。どうか私の心の奥に知恵を教えてください。」

## 2C 人の行いによらない救い

ですから、主は、お決めになったのです。ノアとの契約の中で、初めから、幼い時から悪に傾くからこそ、滅ぼすと言う形で一新するのではなく、ご自身の憐れみと恵みを究極の形で現して、契約を結ぼうとされています。人が行っていることに基づくのではなく、人がどれだけ忠実か？によるのではなく、神の行われていること、神の真実に基づいて契約を結んでくださるのです。

「そんなこと言っただって、きちんと行わないといけないでしょう？」と思われる方もおられるでしょう。また、「恵みばかりを強調したら、放縱になってしまわないか？」と言われる方もおられるかもしれません。けれども、それはまだ、「自分の行いでは、自分は救えない」というところまで、自分の罪深さを悟れていないからだと思います。自分が悪の傾向を持っていて、どんなに努力しても、結局、悪を行ってしまうということに気づいていないからでしょう。

また、主ご自身の前にまだ出ていないということもあります。自分の行いを、自分の心の中でその正しさを推し量っています。あるいは、他の人たちとの比較で推し量っています。人の世界の中で推し量っているのです。けれども、人は、自分自身を欺くことができるのです。エレミヤは、あまりにも罪深いので、自分のことを思い図ることさえできないと言っています。「17:9 人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒やしがたい。だれが、それを知り尽くすることができるだろうか。」主のところに、そのまま出てこようとする人であれば、その悪の深さがあぶり出される経験をします。

それで初めて、神の憐れみと恵みによってのみ、自分は救われることを知るのです。それで、主が、本格的に、契約を結ばれる時に、人の行いではなく、ご自身の真実に基づいて結ばれます。

## 2B 神の真実による救い

ノアとの契約が、創世記 9 章に詳しく出てきますが、その後も、主が契約を結ばれます。

### 1C アブラハムとの契約

アブラハムと、主は契約を結ばれました。「17:7 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、またあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる。」

### 1D 行いによる結果

12 章以降で、私たちはアブラハムの信仰による人生を見ていきます。彼は、最後に主の命令によって、イサクを全焼のいけにえとして献げようとさえます。それで主は、彼を確かに祝福すると約束されましたが、彼が何か行ったから、そうやって約束されたのか？というとは全然違います。

彼の生涯は、間違いが多くありました。サラが、エジプトのファラオなどに、自分の妻であることを隠して、彼のハーレムの中に入れることをよしとしたのです。そんな間違いがありますが、主は決してアブラハムをお見捨てになりませんでした。むしろ、約束のとおり、良くされました。害を受けたのは、アブラハムではなく、ファラオやその周辺です。

### 2D 結ばれる実

そういったことで、アブラハムは主と共に歩むことを学びました。神の恵みと真実を知って、それでイサクを献げなさいと命じられた時に、神を敬い、信じたので、従うことができたのです。つまり、これは「実」なのです。主が真実な方で、この方に私たちが留まっていれば、私たちを通して、神が働いてくださるのです。神が、自分の心や志に働いてくださり、事を行われます。

私たちの肉は、自分が努力して、神に応答してほしいと願います。けれども、実は、神のすばらしさや恵みが自分に注がれて、それに応答することで結ばれるのです。

### 2C モーセによる契約

そして次に出てくるのは、モーセを通しての、神の、イスラエルに対する契約です。「出 19:5 今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。」アブラハムが、主を恐れて、イサクを献げようとしたのと同じように、主の言われることに聞き従うならば、豊かに祝福されるのだということです。

### 1D いのちへの道

モーセは何度となく、主の命令に聞き従いなさいと勧めました。そうすれば、生きることができるかと教えました。主が語られ、御霊によってそれを聞き、従えば、主ご自身の祝福が流れます。そして、永遠のいのちに至るのです。

## 2D...違反した民

ところが、その後のイスラエルの歴史を見ますと、時に、主に立ち返って、御霊による復興が起こりますが、全体の流れとして、彼らは神に背き続けました。

## 3C ダビデとの契約

主はそれでも彼らをお見捨てになりませんでした。その霊的復興の一つが、ダビデが王となった時です。「Ⅱサム 23:5 まことに私の家は、このように神とともにある。神が永遠の契約を私と立てられたからだ。それは、すべてのことにおいて備えられ、また守られる。神は、私の救いと願いを、すべて育んでくださるではないか。」主は、ダビデの家系から王が出て、永遠の御国、神の国が建てられることを約束されました。

## 4C 契約の更新

けれども、ダビデの王家も、主に背き続けていき、あまりにも背いて、周囲の異邦人たちよりも悪を行い、神は、約束の土地から彼らを引き抜くことを決められました。そのこと、バビロンによる捕囚が差し迫った時に預言したエレミヤが、新しい契約を語りました。31 章 31-34 節です。

31 見よ、その時代が来る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——【主】のことば——。

33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——【主】のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

## 1D...心の一新

モーセを介して結ばれた契約は、石の板に書かれました。それを守ろうとしたけれども、結局、違違反することになりました。それは、律法が間違っているあのではありません。律法に聞き従えば、必ずいのちを得ます。それは、イエスご自身が何度となく語られたことです。永遠のいのちを得るには、どうしたらよいのか？ということについて、主は十戒にある戒めを取り上げられました。

けれども、問題は、自分の心にあるのです。これが、アダムから受け継いでいる罪の性質です。幼いころから、悪を行うようになってしまっているという傾向です。そこで主は、契約の内容を一心します。それは石の板に書き記すのではなく、心に書き記すと約束しておられるのです。

## 2D. 御霊の働き

けれども、この、「**わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す**」ということ、いったい、どうやるのか？と思われると思います。主は、ご自分の霊を再び私たちに心に注がれることに決めました。同じ時代に、エルサレムにはエレミヤがいましたが、すでに捕囚の身となってバビロンにいたエゼキエルは、御霊が注がれるという神の約束の啓示を受けたのです。「36:26 **あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。**」新しく、心が変わられるので、それで主の語られることに聞き従うことができます。その関係は、主人としもべのそれではなく、御霊によって、神を父とすることができ、愛され、愛する関係になっています。

## 3D. 血による契約

そして、エレミヤの預言では、新しい契約では罪が赦されることが約束されていますが、それを可能にするのが血です。ノアが献げた時、全焼のいけにえでしたが、イエスご自身は、ご自身が罪のための供え物、いけにえとなるようにしてくださいました。それで、最後の過越の食事の時に、こう言われたのです。「ルカ 22:20 **この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。**」

こうして、新しい契約のしるしとして、主が血を流してくださいます。そのことで、罪が赦され、清められます。そして御霊によって、心が一新されます。その、罪赦され、愛されていると言う確信の中で、主の言われていることに聞き従うことができます。

そして、これは恵みなのです。つまり、自分が何とかしてこねくり回す話ではないのです。イエスを信じることによって、御霊が注がれます。それで、御霊の働きがあなたの心のうちに始まり、その変化を知ることになります。主が、ご自分の聖霊で私たちの内で、また私たちを通して、新しいことを行ってくださいます。このことによって、幼い時から悪に傾くということも、主ご自身が罪を取り除いてくださったので、悪に対して、御霊で対抗することができるようになります。私ではないのです、私の内に生きているキリストがそうされます。